
七色の約束

夢岡さやの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七色の約束

【Nコード】

N3635P

【作者名】

夢岡さやの

【あらすじ】

「両親に頼まれたからって毎日私の世話を焼いて、飽きないの？」
「一度引き受けたことを途中で投げ出すことなど、出来るわけないだろ」頑固で生真面目な幼馴染みと、自由を願う主人公の物語。

1

小さい頃に見た、あの虹が忘れられない。

いつ、どこで、誰と見たのか、鮮明には覚えてないけど…私は幼くて、誰かと手をつないで黙って空を見上げてた。

青い空に、キレイに半円を描いた七色の虹を…

ピピピピピピp・・・

朝を告げる目覚まし時計が、私の部屋で鳴り響く。薄らまぶたを開けると、まぶしい光が入ってくる。

…嫌だあ。まだ寝ていたい。

私は目覚まし時計を止めて、また布団の中に潜り込む。

起きなきゃいけないのはわかってる。今、二度寝したら起きる自信なんてない。

だけど…睡魔には、勝てないでしょ。いやでも…また学校に遅刻しそうになったら…

…でもでも、あと5分くらい目をつむってるだけなら…

「あやね彩音!」

ビクッ！と私は一気に目が覚めて、体を起こした。気持ちよく夢の中に戻ろうとしていたのに、大声で私の名前を呼ばれたからだ。私は声の主を確認するために、部屋の入り口の方へ顔を向ける。だいたい想像はついてたけど…

「…なんで人の部屋に勝手に入ってきてるの？せいいち誠一」

そう言った私は、とても不機嫌な顔をしたと思う。けれど、そんなことを気にする様子もなく、彼は仁王立ちして私を睨んだ。

「何をいまさら」

違う。誠一は私を睨んでるわけじゃない。普段からそういう顔なんだ。無愛想で、感情をなかなか表に出さない男：青葉あおば誠一。

誠一はすぐ隣の家に住む幼馴染みで、親同士も仲良しで、小学校から高校2年生になった今まで学校もずっと一緒。そのことが不満で仕方なかった。

「誠一のへんたい…」

そう言って私は布団をかぶる。我ながら諦めが悪いよね。

「…彩音。遅刻したいのか」

「あー…もう！わかったよ！起きるよ！」

「それでいい」

私はしぶしぶベッドから出た。それを見て、誠一は部屋を出て行った。

「はああ…また誠一に起こされちゃった…」

私は学校へ行く準備を済ませ、リビングへ向かった。

「…いい匂い…」

キッチンから、焼き立てのいい匂いがしてきた。今日の朝ごはんは、どうやらパンのようだ。

私が今食べたいと思ったものが、どうしてわかるんだろう…毎朝のことだからなのかな。

「彩音。冷めないうちに早く食べろ」

「うん。いっただっきまーす」

毎朝毎朝、ホテルの朝食みたいな豪華な料理がテーブルに並ぶ。これ全部、誠一が作ってるんだからビックリ。まあでも完璧主義者の誠一らしいといえば誠一らしい。

それにしても…こうして誠一と朝を一緒に過ごすようになって、何年になるだろう。

私の両親は海外へ長期出張していてなかなか家には帰らないし、誠一のご両親は朝早くから仕事に行ってしまう。だから、いつのころからか、私たちは一緒に朝食をとるようになったけど…

いつまでも…こんな関係ではいられないことくらい、わかってる。

いつも通り、朝食を食べ終えて二人で家を出た。学校へ向かう途中、無言で前を歩く誠一に問いかける。

「ねえ…誠一。もう私一人で起きれるし、ご飯も作れるよ」

「…起きてないだろ、毎朝」

誠一は表情を変えることも、顔をこちらに向けることもなく歩いていた。

「そうなんだけど…もう私の世話焼かなくてもいいよ？大変でしょ？」

「いまさらだな。…忘れてるなら教えてやるが、元はと言えば彩音が、寂しいから朝起こして朝食作ってほしいと言いだしたんだが」

「それって、小学生の時の話でしょ？今はもう…」

「それにお前の父親からも、よろしくと言われてる以上、お前を遅刻させるわけにも朝食抜きにさせるわけにもいかない」

そう言って、誠一は私を一度も見ることなく歩いていく。

誠一って本当に昔から、頑固だけど礼儀正しくて真面目なんだよなあ。そういうところを私の両親も信頼しているみたい。

でも…

私はどうしても、誠一がいることによって自由が制限されているような気がしていた。朝は起こされ、登校も一緒。学校ではクラスまで一緒。

「…私の自由はどうなんのよ…」

小さなため息とともに、ポツリと本音がこぼれる。反応がないところを見ると、誠一には聞こえなかったみたい。

「おっはよ。彩音」

「理子^{りこ}！おはよ」

学校の門のところで声をかけてきたのは私の大親友の天野理子。^{あまの}かわいくて頭はいいし優しい、とにかく完璧な女の子。校内はもちろん、他校にもファンが多いらしい。

今日もサラサラのロングヘアをなびかせて歩く姿は、綺麗すぎて女の私でもほれぼれする。

「あ：誠一くんも、おはよう」

「おはよう。天野」

にっこりとほほ笑む理子とは対照的に、誠一は表情を変えることなくあいさつする。：無愛想だな、コイツ。

「相変わらずクールだね、誠一くん」

なるほどお。そういう見方もあるんだねえ。

私がニヤニヤして2人を見てみると、視線に気づいた理子の顔が赤くなっていく。そんな顔がかわいくて、ついお節介したくなる。

理子は（どこがいいんだか）誠一に惹かれているらしいから。

「あ：私、職員室に用があつたんだった。先に教室行つてて」

「えっ：！彩音！？」

私はそれだけ言つてその場から走って離れた。理子は急に二人っ

きりにされて、どうしていいかわからず固まっている。

「彩音ったら…急に、ど…どうしたんだろうね…」

「…成績でも悪くて先生に呼ばれてるんだろ。気にせずに行行くか、天野」

「…うん！」

氣を利かせて2人から離れたものの、私はどこに行ったらいいかわからなくなっていた。

職員室に用があるのは2人きりにさせるウソだから、今教室に行ったらおかしいし…かといって時間を適度につぶせる場所なんて…

「お！彩音じゃん？おっす」

「おっす！雄斗^{ゆうと}」

私が考えながらフラフラ廊下を歩いていたら、日向雄斗^{ひゅうが}に会った。雄斗は同い年で、去年同じクラスだったのだ。

明るくてクラスのムードメーカー的存在。常に軽いノリで本音がなかなか見えないけど、実は面倒見がよく頼りになる。

「こんなとこで何してんだよ。教室あっちだろ？」

「雄斗だって。隣のクラスじゃん」

「俺は…サボリ」

雄斗は悪びれる様子もなく、ニッコリ笑って上を指さす。私は指の先を見上げる。

「上…？」

「そ。屋上。一緒に来るか？」

「え、屋上？立ち入り禁止でしょ？いいの？」

「ああ。ただし同罪ってことで内緒だからな！」

「へえ、行きた…」

…。

私の心がもう授業をさぼって屋上に行く気満々になったところで、後ろから腕をつかまれた。一瞬にして嫌な空気が流れたのを、全身で感じた。

「…行かないよな？彩音」

「…………誠一」

苦笑いしながら振り向くと、そこにいたのは…怖い顔した誠一。予想通り…というか、ちよつとピンチかも？

「彩音。職員室に用があるというのは嘘だったのか」

「あ…うん、まあね…」

「…………だいたい彩音は行動が軽率すぎるんだ。もう少し自分の言動に責任を持って、日々の生活を見直」

「あー！わかった！ごめん！」

誠一の説教は長くなると周りを気にせず続けてしまうから、早めに私が謝るしかない。私が嫌々ながらも誠一に従ってる理由の一つだ。

「雄斗も、校則違反なことに彩音を誘わないでくれるか」

「おゝ怖。あいかわらず彩音の保護者なのかよ。ご苦労さん」

2人の間に沈黙が流れる…

この2人って、生真面目と自由奔放だから何かと意見がぶつかっ

てしまうらしい。その度に火花を散らしていたので、今ではすっかり犬猿の仲。

「授業が始まってしまふ。行くぞ。彩音」

「またね、彩音」

「あはは…またね、雄斗」

私は誠一に腕を引っ張られながら教室に戻ることに。

いつもこうだ。私がなにか規律を乱すようなことがあると、すぐに誠一が止めに来る。私の親以上に、先生以上に、私に干渉して世話を焼く。

確かに、誠一は間違ったことは言わないし、正しい道に私を戻そうとしてくれる。だけど、私の意見なんて一切聞き入れてくれないから腹が立つ。

「…ねえ誠一。私、屋上行ってみたいなあ」

「立ち入り禁止の意味を彩音は知らないのか。なら教えてやろう」

「いえ。わかります。ごめんなさい」

3

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、私は背伸びする。次は待ちに待った昼休みなので、誠一に作ってもらったお弁当をカバンから出そうとしていると…

「ねえ…彩音はどう思う？」

「ん？何が？」

気がつく無理子がお弁当と1枚のプリントを持って立っていた。

「彩音ったら、授業聞いてなかったのね？」

「あはは…半分寝てた」

苦笑いしている私に、理子は持っていたプリントを見せた。

「生徒会の選挙だよ。…私、副会長に立候補しようと思って」

そのプリントには『生徒会役員選挙！』と大きく書いてあった。内容によると、生徒会役員になるには立候補でも推薦でもいいらしい。

「理子はしっかりしてるし、いいんじゃない？ピッタリだよ」

「そうかな…？そう言ってもらうと嬉しい…」

「でも、どうせなら生徒会長に立候補すればいいのに」

私のその言葉に、理子は顔を真っ赤にして固まってしまう。この反応ってことは…

「あの…誠一くんは…その、生徒会長に立候補しないのかな…？」

「誠一？」

「俺が何？」

「きゃあっ！！！」

「うわっ！ビックリした…急に現れないでよ、誠一」

誠一は心外だと言わんばかりの顔をしている。一方理子は、真つ赤な顔のまま私たちに背をむけた。

そんな理子の後ろ姿を見て、私はさっきの言葉を思い出し誠一に聞いてみた。

「誠一は生徒会の役員に立候補しないの？」

「…ああ」

「ふーん。バカみたいに真面目な誠一なら真っ先にやりたがるかと思っただけ」

「…バカみたい、は余計だ。それに興味がないわけではない」

誠一のこの言葉に、理子がピクリと反応し振り返る。

「じゃあどうしてなの…？誠一くんならきっと誰より適任だと思うんだけど…」

「…忙しいからだ。それより昼食なんだが、俺は用があるから食べてくれ」

「はいはい。了解っす」

誠一はさっさと教室を出て行った。理子は名残惜しそうに後ろ姿を見ていたが、見えなくなると向き直りお弁当を取り出した。

いつからか、教室では私と理子と誠一の3人で過ごすことが当たり前のようになっていた。私は不満だったけど、理子が嬉しそうだから文句は言わないようにしているけど…

「そういえばさあ…理子はなんで誠一が好きなの？」
「…えっ……」

突然の私の言葉に、理子は箸でつかんでいた唐揚げを落としてしまふ。顔を真っ赤にする理子がかわいくて、ますますわからなくなってくる。なんで誠一なの？

「だってさ、無愛想で生真面目で、冗談なんか通じない石頭で融通は利かないし」

「そんなことない！誠一くんは優しいよ！」

いつも大人しいな理子が、声を張る。私はびっくりして、静止してしまった。

「…私ね、入学式るとき、誠一くんに助けてもらったの」
「誠一に？」

「うん…男の人に囲まれて、どうしていいかわからなくなってる時に間に入ってくれて…」

「理子かわいいもんなあ…私が男ならほっとかないもん」
「もう…彩音ったら」

それにしても…誠一らしい。昔から曲がったことが大嫌いだから…

「あはは、なんか想像できるなあ。誠一のやつ、『嫌がっているのかわからないのか。なら教えてやろう』とか言ったんじゃないの？」
「……彩音、すごいね…その通り言ってたよ」

まあ長年、幼馴染みやってるし、毎日そんな感じで怒られてるから…

理子は遠くを見ながら言葉を続けた。

「私、何度か男の人に囲まれることはあったけど、男の人に助けてもらったのは初めてだったから…」

「そうなの？」

「うん：誠一くんみたいな人、初めてだし…：知れば知るほど惹かれてくの…」

そう言ってほほ笑んだ理子は、とっても大人びていて綺麗だった。

ふと不思議な感覚に陥った。

小さいころから知っている男のことを語られてるはずなのに、全く別の男の話のような気がしていた。

目が覚めると、もう日が沈み、放課後になっていた。どうやらまた、机に顔をふせて寝ていたらしい。：誠一にバレてなきやいいけど。

「気持ち良さそうに寝てたなあ、彩音」

「わっ！びっくりしたあ：なんだ、雄斗か」

急に声をかけられ顔をあげると、雄斗が前の席に座っていた。でも隣のクラスの彼がなぜここに？

「なんだとは失礼だなあ。俺じゃダメ？」

雄斗はそう言って軽くウインクしてみせる。こういう行動が簡単に出来てしまうのが雄斗だ。

「あ、ごめん。誠一かと思って」

「ああ、なるほど。：それよりさ、天野知らね？」

「理子？」

私は理子の席の方を見渡した。そこに理子の姿はなかった。

「ごめん、わかんない。なにせ、ご覧のとおり今起きたところですから：えへへ」

「そうだったな。ったく：どこ行っただ？」

「：急用なの？」

「そういうわけじゃねえけど：ちっと探してみる。じゃあな」

「うん。また明日」

私は雄斗に手を振った。

雄斗が理子になんの用なんだろう。

背が高くて女の子には優しい雄斗は、女の子に人気がある。そんな雄斗と理子が並ぶと言葉を失うほど絵になるという噂があるが、2人はなかなか話はしない。

なぜなのかは私もよく知らないけど、お互いに避けているような気がする。

「彩音。帰ろう」

「あ、誠一。理子見なかった？」

「さあ。見てないが」

「…そう。役に立たないなあ」

私の一言に、無表情の顔がピクリとする。私は決して悪気があったと言ったわけじゃないの。…多分。

「放課後になったのもわからないくらい寝てた人には言われたくないな」

「げ…見てたの？」

「だいたい授業中に寝るといことがいけないことだと、何度言ってもわからないみたいだな」

「わかってますわかってます！さあ早く帰ろう！！」

私は誠一の背中を押しながら教室を出た。そして適当なこと言っ
て話題を切り替え、誠一の機嫌をとったりして…なんとかお説教から逃れることが出来たみたい。

誠一の扱いに慣れてきた、そんな私が悲しい…

「いだっ！」

前を歩いている誠一が急に立ち止ったので、私は顔を誠一の背中にぶつけてしまった。

「…いてて…どうしたっていうの、誠一」

誠一は私の話が聞こえてないようで、壁をむいてじっとしている。視線の先を追うとそこには1枚のポスターが貼ってあった。そのポスターには…

「『キミも生徒会に入って学校の為に活動しよう』…?」

それは、生徒会役員を募集するポスターだった…
やっぱり誠一、やりたいんじゃない。

「…誠一やればいいじゃん。何をためらってるの?」

「…ためらってない」

「ったく。何をそんなに頑なになってんだか…じゃあ帰ろ」

深いため息をしてその場を離れようとしたとき、私はハッとした。
そしてゆっくりと誠一の方へ向き直り…

「まさか…私の世話焼かないといけないから…なんて言わないよね…?」

「……………」

誠一は表情を変えることなく黙っている。それは肯定していることと同じことで私はイラ立っていく。

「ちょ、ちょっと待ってよ! 生徒会に立候補しないのは、私のせい

だっていうの!？」

「…そうは言っていないだろ」

「そう言ってるのと同じじゃない!」

私はまわりを気にせず、つい怒鳴ってしまった。近くを歩いていたひとは、チラチラとこちらを見ている。

誠一は静かに口を開いた。

「彩音、黙って聞け」

「なに…?」

「俺は、お前の両親からお前のことを頼まれてるんだ。生徒会に入れば集会などで時間が割かれ、朝早く登校することもあるだろう。そうなれば誰が彩音を起こし、誰が朝食を作るんだ?」

私は誠一の言葉を聞いて、何を言ってるのか瞬時に理解できず絶句してしまった。

この人の責任感って一体……

学校から家までの帰り道は、そんなに長くはない。

けど、今日の私はいつも以上に誠一と帰るこの道を、長く感じていた。

「彩音。帰りが遅くなる。早く歩け」

「……………」

「彩音。明日の朝食の材料を買って行くか」

「……………」

「彩音」

「もういい加減にして！！！」

私は下を向いたまま大声を出した。誠一は表情を変えず、いつも通り私を見ている。

「私だって子供じゃないの！朝だって起きれるし、朝食だって作れる…もう誠一に世話してもらわなくても大丈夫だから！」

「……………だから？」

「だから…生徒会やれば？」

風が強く吹いているだけで、私たちの周りには誰もいなかった。もう陽が傾いていて私たちの影が伸びている。

「……………ならば、一人で起きてみるか？」

「……………へ…？」

「一人で起きて、朝食作って遅刻せずに登校してみろ」

予想外の誠一の言葉に、私は言葉を失っていた。まさか、誠一からそんなこと言われるなんて……いつもなら絶対許してくれないのに。黙っている私を見て、誠一が口を開いた。

「無理なのか？」

「えっ！？む……無理じゃないよ……！」

「じゃあ明日は一人でやってみろ。もし出来なかったらもうこの話はナシだ」

誠一が私に背を向けて歩き出す。誠一らしくない誠一の言葉に、私はあることをひらめいた。

誠一が生徒会に入れば私にかまってるヒマはなくなるし、理子は副会長になって誠一と仲良くなりたいたいだし……もしこの二人が付き合うなんてことになれば、それこそ誠一は私の成績が落ちようが、どこでなにしようが気にしなくなる。

つまり……私は自由、理子は幸せ………一石二鳥？……なるほど。

私は誠一の背中に向けて指さした。

「じゃあ！もし出来たら！生徒会長に立候補してよ……！」

「……出来たら、な」

誠一は背を向けたまま答えた。

私は夕日に向かって握ったこぶしを突き出した。

よし。

この機会に誠一を生徒会に放り込んで、理子とくっつけて、長年奪われ続けてきた私の自由を手に入れてやる……！（……ちよっと大袈裟か？）

名付けて！

『理子と私一石二鳥大作戦！』

……ダサいなあ。

翌朝。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。p・・・

…どこかで目覚まし時計が鳴ってる…早く止めてよ、うるさいなあ……あ、私の時計か。

私は目覚まし時計を止めて、また布団にもぐる。

まだ誠一來てないし、大丈夫だよな…うん。誠一が起こしに………

「来ないんだったッ！！！！」

私はあわててベッドから出て支度をする。時計の針は、もう朝ごはんを食べてたら間に合わない時刻を指していた。

遅刻をしたらアウト。青ざめた私はとにかく家を飛び出した。

「負けるかあ！絶対間にあってやるうう！！」

バタバタバタバタ・・・！

ッ！！

「ハアハア…お、おはよう！理子」

「あ、彩音おはよう。どうしたの？息切らして…」

「セーーフ…」

全速力で走ったことでなんとか遅刻5分前に教室に入ることが出来、私はホッと一息ついていた。

誠一はそんな私を不機嫌そうな顔で見ている。私は誠一に勝利の笑みを浮かべた。

「…フツ。勝負あったな、誠一」

「廊下」

「…へ？」

「廊下走るな」

誠一の低い声に思わず後ずさったが、私は強気で言い返す。

「そんなことより約束だからね！私遅刻しなかったんだから、誠一、生徒会に立候補するよね？」

私の言葉に誠一は深くため息をついた。私は、誠一が諦めたかのように見えたんだけど違ったみたい。

誠一は読んでいた本を閉じて、私の方を向き直った。

「俺は、『一人で起きて朝食作って、遅刻しなかったら』と言ったはずだが？」

「何が…？だから出来たじゃない…」

「…朝食は？」

ギク…

それをつっこまれるとどうしようもない…だって寝坊したから作ってもいなければ食べてもないもん。

でも、食べたか食べてないかなんて誠一にわかるはずないんだから、ここは誤魔化して…

「…ちゃんと…やったよ」

「きちんと自分で作って食べたんだな？」

「…だから…ちゃんと…」

「ちゃんと？」

「…」

「彩音」

「…ごめんなさい」

あー！！もう！！私のバカ！！誠一の威圧に耐えられないなんて…

「だいたい時間ギリギリに登校してきたのに朝食を食べてるわけないだろ。そういうことでこの話はナシだな」

「ちょ…ちょっと待ってよ！朝食なんて食べてなくても遅刻しなかったんだから…」

「わかってないな。なら教えてやろう。朝食というものは一日の基本になるもので食べたときと食べなかったときでは」

「あーはいはい…わかりました…」

「まだ話は終わって…」

「あ、チャイム鳴った。席つかなきゃー」

「……」

誠一はいつも以上の無愛想な顔をして私を睨んでいた。私は作戦が早くも失敗してしまったので、もう一度頭をひねっていた。

このままじゃ誠一は立候補してくれない。

作戦変更…！誠一をなんとしても生徒会に入れるんだ！私、諦めない…！

授業が終わって私が教科書をしまっていると、理子が近づいてきた。今日もかわいい理子の顔は赤く染まっている。ということは…

「彩音…さっきの誠一くんとの話だけど…」

「あ、聞いてた？」

「うん…聞こえてた…生徒会についてどういうこと？」

「あー。理子にとっては悪い話じゃないと思うんだけど♪誠一に生徒会長やってほしくて」

そう言ったのと同時に理子の顔がぱあっと明るくなる。

「…彩音もそう思うの？やっぱり適任だよねっ！頭もいいし責任感はあるし！」

「あ…いや…そういうわけじゃないんだけど…でも本人は立候補するの嫌がってるし」

「じゃあ推薦は？」

作戦を練っていた私は、理子のにっこり顔に一瞬手が止まる。

「それだああ!!!!」

私の叫び声が教室中に響いた。

そのあと誠一に怒られたのは言うまでもない…

理子の名案で作戦第二弾が始動していた。それはただ、誠一を生徒会長に推薦するというものだったりするが。

教室では誠一がいて作戦を聞かれてしまう可能性がある為、私たちは屋上前の階段に座り、会議していた。

「でも、3年生とかで立候補してる人がいるとやっぱり選挙では不利になると思うの」

「ふむふむ…」

理子はすっかり私に協力してくれている。頭のいい理子と行動派の私が手を組めば怖いものナシ!!（ちなみに私たちは2年生）

「まさか生徒会長に立候補する人が誰もいない、なんてことないだろうし…」

「そうだよね……」

「そうでもないみてえだけど？」

「ッ!？」

私たちは背後から聞こえた声に、心臓が飛び出るくらい驚いてしまった。

振り向くとそこには見覚えのある顔が…

「雄斗!!もおビックリさせないでよ…昨日といい今日といい…」
「わりいわりい♪」

そう言って雄斗はなににも悪びれた様子もなく笑った。
それにしても、この階段の上から来たってことは、雄斗はまた屋
上に行ってたんだな。立ち入り禁止なのに。

「それより雄斗。そうでもないってどういうこと？」

「それがよ、今年の3年生ってもうだいたいが進路決まってるだっ
て。だからわざわざ生徒会長やって評価あげることねえし、2年生
も1年生も今のところ推薦のみ」

「へー…そうなんだ！じゃあいけるかな、理子」
「え、あ…うん。いいんじゃないかな」

理子は私の顔を見ないで答えた。その様子は明らかに変だ。目が
泳いでるというか、気まずそうな顔をしていた。

そして私の視界には雄斗が入ってきて、なんとなくだが予想がつ
いた。

「それよりさあ彩音。それって誰を生徒会長にしたいわけ？」

「え？誠一だよ。雄斗も応援して〜！」

「げ…フツーに嫌だろ。あんなのが生徒会長になったら俺、登校拒
否する」

「えー！？」

「アイツの支配下で俺は生活できねえ…」

支配下って…

呆れる私をよそに、ツーンといった顔をしてそっぽを向く雄斗。
…よっぽど誠一がキライらしい。

「それに、俺も推薦されてっから。生徒会長の座に」

「え！？うそっ！？なんで！？」

「なんか俺のファンだっていう女達が勝手に。まあ当选しちゃった

らごめんってことで」

雄斗は私たちにヒラヒラと手を振って去っていく。その姿に私たちは立ち尽くすしかない。しかし私はこみ上げてくるものを抑えきれなかった。

「な…なん……なんですとー！ー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3635p/>

七色の約束

2011年1月11日17時19分発行